

世に無き父母を思ひ浮べて追慕の涙に暮れたのである。その地、今にのこる身延山上、霧立ち籠る奥之院思親閣である。

今にして昔のまゝ聳え立つ鉢陀利の峯は、六百五十餘年前の實情を永遠に物語る者である。その峯を朝な夕な仰ぎ見、且登りて當時を追想する時、我々は聖人の御靈に觸れ、涙に浴する事が出来る。聖人の御靈は永遠に身延の峯に棲み給いて、何時も思親の涙に暮れて居る。

親思ふ涙。其の涙こそ一切衆生を救はんとした聖人の慈悲に滿ちた涙にあらざして何んであつたらう。

(皇紀二五九一、九、一〇)

父母ぞなき人と語りて登りけり 我が袖ぬるゝ孝の坂道

以上

映畫布教に巡りて

梅 谷 英 學

數日來の雨つゞきも、今日はめづらしくからりと晴れた。時は日増しに暑さを加へて來た七月廿三

日、柴田宣傳部長並學院教授結城先生を始め、私等映畫班の一行は、佐世保會館を第一に、長崎、佐賀、福岡、熊本、大分、岡山、山口の七縣に亘りて日蓮大聖人第六百五十遠忌紀念映畫大宣傳の火蓋を切つたのであつた。

一度其聲ひびくや各地共前代未聞の大盛況を呈し、私達は度重る毎に、今迄になき試練と經驗を與へられ、八月三十一日迄約四十日間に亘り、其の觀衆約五万五千を越へ、無限感激の中に昭和六年度夏季映畫布教の幕を閉ぢたのであつた。

宗教は人類要求の最深處に根ざした要求である。時代は如何に變化しようと宗教の絶滅する時代は決してない。きつと何かの形式によつて更生するであらう。今や我國は思想財界共に、日一日と衰れな状態に直面し、人心恐々として一日も安き日はない有様に、何を以て我々宗教家として法衣をまとひ指導者となるものが不滅慰安と、信賴とを與へて行くか。唯名譽、財産、地位のみに頭を下げてよいのか、否眞のモットーは我が日蓮聖人の宗教であり眞の堅實な信仰でなくてはならないのである。我祖建長の朝より弘安の夕に至る三十ヶ年の間、あの忍難弘通は何のためであつたか、そして迷へる我々に何を示されたか、それはこゝに述べるまでもなく、心の奥底迄深くしみ渡つてゐるはずである。

私は以下映畫宣傳の一狀勢を述べて、簡單に巡教中の感想を記して見たいと思ふのである。

吾祖棲神の泮窟、天の靈山、地の寂光土身延の御山よりの派遺で然も時代にふさわしい映畫宣傳である。居ながらにして身延山へ參詣し日蓮大聖人の御一代記を目の前に拜し得ると言ふ事は何たる喜びぞ、宗門の人々は勿論、大多數は權門の人々で、夜七時の開催に晝食より辨當持參と言ふ熱誠振りに、開催地毎にいつも滿場立錫の餘地なき有様であつた。信仰ある人も無き人も又權門の老若男女を問はず、吾日蓮大聖人と言へば他の開祖とは全然異り、自然的に植えつけられた何とも言ひ知れぬ敬慕と尊敬の念がふか／＼染み入つてゐるらしい。然し悲しいことには、心にえがき又慕つてゐても縁淺くして大聖人の御慈悲にすがり得ぬのは實に遺憾とせねばならぬのである。こゝに我々宗教家は無縁より有縁に引き入れ宗祖の慈悲を眞に味得せしめねばならない。恐らく九州のみではない現代の寺院僧侶は有難き宗祖の食を頂いて何として居るのか。あまり我儘な夢にふけつてはゐないか、果して宗祖に對し万分の一も御手傳が出来てゐるか、各人が深く胸に兩手をあてゝ考へて見た時實に汗顔に堪へないものがある。紙上の都合寺院の狀勢は略するが、私達の願は、今少し私利を去つて本當に救の慈悲者となつて頂き度いのである。信仰と言へば又老人閑人の仕事の如く考へてゐる人々が多い様であるがそれは根本的誤りであつて、布教中各地の青年護法會の方々の熱意ある活動に感激した所も

多くあつた。然し未だ十分に若き青年男女より意氣ある信仰の亀鑑を、すべての人々に徹底的に垂れさしめてゐないことを痛切に残念と思つたのである。

開催中柴田僧正並一行は日夜の苦闘に心身共に疲れ果て將に陣頭に斃れんとせしことも數回、然し吾祖の加護と日親上人の九州に於ける忍難弘通の昔を偲び、又觀衆の熱と力とによつて元氣百倍し無事に大團圓を告げることが出來た。殊に法戰のたけなはなりしは、現身延山執事長冷泉僧正の御出生地の長州萩である。こゝは明治維新の大業にあづかつてその名ある幾多傑士の輩出せし松下村塾の舊跡地である。吉田松陰先生の勤王の大義は、人も知る伊藤博文、高杉普作、木戸孝充、久坂源内等の門下の血と涙の奮闘に依つてなされ國家の柱石として其名天下に響いたのである。然ればその松下村塾は堂々たるものかと思ひの外、僅か六疊二間の貧しい建物だ。此みすばらしい家よりあの大柱石が生れ出でしかと思へば實に感慨無量である。この史蹟より見ても、大和民族として恥しくない立派な人間は、高僧優美な家より出づるものではない。若人の至誠努力こそすべてを超越して堅實なる立派な人間を築き上げるのである。如何に小さな學校にせよ決してなげくべきでない。唯其内に育てられて行く若人の奮闘努力こそまつべきである。かくの如く歴史に名高い萩町に於て吾祖大聖人の勤王の大至誠と相俟つて、觀衆の熱するのは當然でなければならぬ。然るに、權門の寺院既に四十餘ヶ寺、我が宗

門の道場僅か一ヶ寺、住職の奮闘も忍ばれた。時は恰も八月三十日、幸か不幸か京都本願寺よりも同日同時刻に於て、蓮如上人一代記映畫布教が萩町別院に於て開かれた。この二つの標的に、新聞紙上は勿論近郷近在の大衆は如何に注目したことであつたか。併し京都本願寺映画布教隊も心のまゝに目ざす大衆の足を引きとめることは出来なかつた。七時の開催時刻に我が映畫布教陣地には瀧場立錫の餘地なき大盛況を呈し、數千の大觀衆は十一時終了迄一人として立去るものもなく大に面目を施したのであつた。一方別院の狀勢は僅か百人足らずであつたといふ。果して人々の腦裡には如何なる印象が残されたであらうか。こうしたことを寸分も誇るのではない、どこまでも大聖人の御偉徳の深大さを感じて目覺めつゝある人々を逃さぬ様死身弘法の法戦にはげまねばならぬのである。

時代の進歩と共に、傳道布教に各宗とも擧つて力を映畫にそゝいで來た。唯説教の手助としてセンチメンタリズムの映畫をつくり、それを名付て宗教映畫ともてはやしてゐた時代は過ぎ去つた筈である。而して映畫藝術としての本質的な認識を根本として本格的映畫心理を意識し、そこに宗教的全生を投出した眞の宗教映畫が生れなくてはならない時代である。未だ宗教映畫として東洋的趣味のある映畫が生れない。殊に我宗門の如き殉教史に輝く多くの人々を映畫化して、死身弘法の規範としての歴史と物語つたなら信仰の礎も益々堅固になるだらうと思ふ。従つて説明に立つ人も誠心誠意

以て其の任にあたるにちがひない。昔の説明は多く出来る丈け流暢に言ひ續けて、もてはやされたのであるが、現代はそうしたことは却つて映畫觀賞感をさげつけるものであつて、却つて判らなくなつてしまふ。依つて説明せねばならぬ事丈けを靜かに上品に説明し、殊に相手をよく考へ、それが兒童である場合は尙簡單明瞭を必要とするのである。それは兒童は大人より映畫に依る直感力が一段上であるからである。解説のモットーは「藝術は餘韻である」と痛切に感じる。

各宗共歐米諸國にその手を延ばしてゐる。我が身延山は歐米は勿論世界中を皆歸妙法の旗風に靡かせなくてはならぬ。たとへ出来なくとも佛陀の大慈悲に悟入せしめやうと努力に努力を重ねて行く所に我等の使命は存在するのである。それは映畫のみでなく、すべてに於て堅實なる信仰と努力とが心要である。いつも幕をとちて歸路につくころは草木も眠る丑滿の頃であつた。人々は歡喜に満ちて立去つて行く。ひつそりとした秋の夜に實相真如の月光を浴び鎮西の空より身延の御山を伏し拜み、そぞろ鳴く虫の聲を耳にしながら法悦にむせびつゝ靜かに月影をふんで宿路に就いて居たのが常であつた。

此旅に於てつくづくと感じた事は、さばきの法庭に引かれて人目を忍び行く哀れな囚人の姿を見た事である。又ルンペンの哀れな姿、そしてパン故に尊き生命迄も路頭にさらし行く人々の姿であつ

た。嗚呼、之等哀れな人々を眞に救濟する者は果して誰ぞ、そは宗教家の使命ならずや。然るに見よ、世の一切衆生を救ふべき出家の身が。一宿一飯を乞ふ同じ佛子である彼等を殘酷にも青竹を以て追ひ、なほもすがり來る彼等に追放の一撃を加へてほゝえんでゐる鬼の様な姿をまのあたり見せ付けられた。何と言ふ人非人の振舞だ。然も法衣をまとふ者が。非難の聲が起るのも無理からぬ事である。何で黙しておられよう。一体何の爲の宗教生活だ何の爲に佛の御弟子となつたのだ。如何なる姿のものにせよ皆我が同胞であり佛様の御子である。

「大罪ナレドモ懺悔セバツノ罪キエヌ、小罪ナレドモ懺悔セザレバ罪重シ」

と尊き御聖訓の通り、ある囚人が前非を悔い立派な人間として、佛の御子として更生の第一歩を踏み出さんとせしものが、世の人々が之を前科者としてつまはじきしゆく無慈悲の爲に、再び暗い鐵窓の中へ………思へば思ふ程世のあさましい姿にまぶたのあつくなるのをどうすることも出来なかつた。

我々は出家だ、そして同じ佛の御子、天子様の御子である。自分の力の及ぶかぎり慈悲の力、強き腕に抱擁して行かねばならぬ。これが本當の信仰だ。御題目の百万遍唱へても實行なき我儘題目では何の役にもならない。我々はお題目を身に行ふ者となつて行きたいのである。

囚人の姿を見て指し笑ふ人々、目前におかした行のみに善惡の批判を加へ、その人の人格を評價す

ることはあまりに残酷である。我々が法律で満足出来ないのはこゝにある。平等に悪を懲し善を勸むるものであつても、それは犯したその行爲のみ標準として、善惡の基礎條件をつけるからだ。その惡人がのがれたい必死の運命にもがいて尙救われんとする所に、底知れぬ人間の美しさがある。而してそれを求めて行所に宗教はある。そして眞の人間の精神生活の實踐窮行は我が日蓮聖人の宗教であり信仰あるのみである。

始めての映畫布教に際しまだ外に布教日記と感想を記したいと思ふが原稿の制限上こゝで筆をとめる。最後に映畫のみでなく、布教傳道にすべて國家及び宗門を憂る人々は至心努力を以て我祖の大精神を宣揚して頂き度いのある。巡回に對し御懇切なる御盡力を賜つた各所の方々に感謝し御健在と宿縁益々深からんことを祈願しこゝに擱筆する次第である。

唱題得意論

田 中 義 正